



人と出会う、本と出会う

『きいろいばけつ』と かけがえのない時間

女優・エッセイスト 中井 貴恵



前からずっと欲しいと思っていた物が、もし、ぼつんと野原に落ちていたら、あなたならどうするだろうか？

名前も書いてなく、だれの物かも分からない。落としていったのか、必要がなくてここに捨てていったのか……。でも前からずっと欲しかったもの。

すぐに拾って持っていくってしまう？ それとも、しばらくそこにおいて眺めている？ 周りにだれもいないことを見計らって、そつと懷にしまう？

そう、この『きいろいばけつ』（あかね書房）は、ずうっと前から欲しいと思っていた、ひとつのきいろいばけつをめぐる主人公の、一週間の物語である。

『きいろいばけつ』は、『つりばし ゆらゆら』『あのこにあえた』『たからもの とんだ』『ぼくだけしってる』とならび、「きつねのこシリーズ」と呼ばれる一連のシリーズ童話の一つである。お人好しで、健気で、ちょっと内気な主人公こんすけ。いつのまにか、主人公の姿に自分の子供時代をだぶらせ、どの物語も最後には、懐かしさに似たせつなさがこみあげる。不思議なことに、これまで子供に何冊もの絵本を読んできたが、正直言って、「絵本」がこれほどまでに胸にしみるメッセージをもっているということに、それまで気がついたことはなかった。どの作品にも一貫して流れる、作者森山京さんの無駄のない文章と、画家土田義晴さんの描く愛らしい挿絵が、一気に私を絵本のとりこにした。

五年前から始めた「大人と子供のための読みきかせの会」の第三作目の作品として、私たちはこの『きいろいばけつ』を取り上げた。私たちの読みきかせの特徴は、原作の絵本を忠実に模写し、それぞれの作品によって違う形の大型絵本に仕立て直すということ。そして、その絵本を見ながら聞いてもらう物語に、音楽が入るということである。

この作品では、三つの絵を同時に見せていける三面鏡型の大型絵本をつくり、音楽には、ピアノ、箏、尺八を取り入れ、全編オリジナル曲で物語を彩った。

ある日、野原でひとつのきいろいばけつに出会う主人公こんすけ。実は、こんすけは前からこんなばけつを欲しいと思っていたのである。名前もなく、だれの物かも分からないきいろいばけつ。すると、こんすけの友達のくまくんとうさぎちゃんが、こんな提案をする。「もし、だれも ところに ことなく、そこに ずっとおきっぱなしだったら、きつねくんのに したら？」そこで、三匹は「一週間」という時間を決める。もし、次の月曜日になったらだれも取りに来なかったら、きつねくんのものにしよう。

それから、こんすけは毎日ばけつのもとを訪れる。火曜日、水曜日、木曜日、ばけつはちゃんと野原にある。雨のふる金曜日にも、こんすけはばけつのもとを訪れ、土曜日には、ばけつにたまった雨水をそつと流す。日曜日には、くまくんもうさぎちゃんもばけつを見にやってくる。



中井貴恵（なかいきえ）

女優。エッセイスト。現在はボランティアグループ「大人と子供のための読みきかせの会」の代表をつとめる。仕掛けたつぷりの大型絵本と生の音楽をつけた独特の読みきかせは大人気を博し、幼稚園、小学校や小児病棟などで行われる公演は年間百回にも及ぶ。主な著書に『ニューイングランド物語』（文芸出版局）、『父の贈りもの』（角川書店）『大人と子供のための読みきかせの会「5年間の物語」』（プロンズ新社）などがある。

「あと、ひとばん まてば いいのよ。」「だいじょうぶ。あしたは ぜったい きみの ものだよ。」「二匹のその言葉を信じて、ふとんに入ったこんすけ。そして、一週間たち、とうとう月曜日の朝がやってくる。期待に胸をふくらませて野原にやってくる、きいろいばけつはなくなっているのである。

どうして？ ちゃんと一週間我慢したのに。だれが持っていたの？ どこに消えてしまったの？ 物語を読み終えただれしも、ばけつの行方が気にかかる。

しかし、物語の最後に、森山さんはきつねのこのこんな心理を描写する。

「たった いっしゅうかんだったのに、ずいぶん ながいこと、きいろい ばけつと いっしょに いたような きが しました。そのあいだ、あの きいろい ばけつは、ほかの だれの ものでもなく いつも じぶんの ものだったと、きつねの こは、おもいました。」

きいろいばけつがこんすけのものになることより、こんすけがきいろいばけつと過ごした時間が、何よりもかけがえのないものだったのだ、とこの本はやさしく語りかける。

いつだったか、『きいろいばけつ』の公演会場に森山さんが遊びに来てくださったことがあった。公演終了後に、森山さんに一人の子供からこんな質問がとんだ。

「ばけつはどこへいったんですか？」 作者ならその行方を教えて

くれるだろう、と会場中の子供たちがその答えにききいった。

すると、森山さんはこう答えた。「あのね、それは私にも分からないの。」質問した子供はぼかんとした顔をした。

「じゃ、君はどう思う？ ばけつはどこへいったと思う？」私がそう尋ねると、「ううん、風に吹かれてどこかへ飛んでいったんだと思う。」とその子は答えた。森山さんはにこにこ笑って、その子の答えにうなずいた。

ばけつがどこへ行ったのか、その行方に、子供たちはそれぞれの思いを巡らせる。ばけつの行方に思いを馳せる子供たちは、その後ろに流れていた「かけがえのない時間」のことには、まだ気がつかないかもしれない。しかし、大人の私たちには、ばけつが自分のものにならなかったからこそ、過ごした時間はあまりに貴重、そして、忘れることのできない時間であることが胸に迫る。ばけつの行方を追い求める子どもたちも、いつか、この「かけがえのない時間」の存在に、必ず気がつくときがやってくる。物語に流れる「時」の描写の美しさ、声に出して読むときの「日本語」の美しさを感じ、読むたびに、童話としての完成度の高さを感ずる作品だ。

『きいろいばけつ』は、長い時間をかけて、ゆっくりと読み伝えていきたい珠玉の童話、と私は思っている。